

巻頭言

筑波大学特別支援教育連携推進グループに期待すること

筑波大学特別支援教育研究センター
初代センター長・筑波大学名誉教授 齋藤 佐和

特別支援教育制度への移行議論の渦中にいた頃、盲教育、聾教育の専門性低下の恐れもある新制度移行に抵抗しつつ、一方で、それまで各教育が自らの内的発展に手一杯で、外部への発信と障害教育間での連携が希薄であったことに気付かされ、深く反省もしました。この反省が底流にあり、障害教育の専門性の継承とともに、これまで不足してきた役割を果たすため、2004 年、特別支援教育研究センターが立ち上げられました。障害種別特別支援学校 5 校を附属学校とし、心身障害学系（当時）という障害に関わる国内最大の研究組織を持ち、教員養成・現職研修にも伝統のある筑波大学として当然の役割であると、当時関わった人の誰もが納得しての出発だったと思います。旧茗荷谷校舎のちょっと薄暗いテリトリーで、数少ない当初メンバーが、何をすべきか、何が出来るか、議論し知恵を絞り、走り回り汗を流した日々は忘れられません。

連携推進グループが果たそうとする教員研修機能、通常学校支援システム開発機能、研究開発・理解啓発機能、相談支援システム開発機能は、センター発足当時に考え抜いた機能の継承です。特別支援教育制度も実施 10 年を越え、インクルーシブ教育システムの中では関係機関の連携はますます必要度の高いものになってきていますが、繋がり広がるだけでなく、連携には何か芯になるものがあってこそ質の高いものとなります。芯とは、やはり蓄積されてきた先人の見識、対象となる子どもについての深い理解と必要な教育的対応に関わる専門性だと思います。連携推進グループには、「芯のある連携推進」を期待したいと思います。専門性の存在を知るものは、それを実践で伝え、さらに言葉で伝えていくべきです。附属学校教育局に 5 校から 5 人の教員の枠組みは残りました。専門性発信のための機能優先の橋頭堡とも言えます。各学校の教育と結びついた現職研修の堅実な継続、特別支援学校、通常学校、国内外への発信の拡充、5 校集結を活かした専門性の相互活用や融合、そして距離は離れても筑波地区人間系との研究連携を確実に進めていってほしいと願っています。

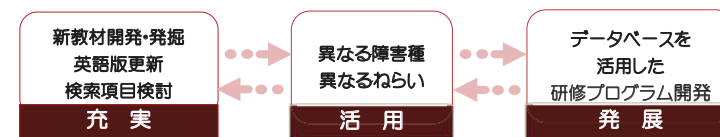
教材・指導法データベースの効果的な運用に向けて

筑波大学附属特別支援 5 校の実践知を蓄積した教材・指導法データベースは、2016 年の公開から 2 年が経ちました。現在、355 の教材情報が集約され、公開当初からのアクセス数は 23800 件にも上っています。昨年度は、173 件の英語版教材を準備して、国外への情報発信に踏み出しました。その結果、J I C A で来日されたモンゴルを始め、ベトナム、マレーシアなどのアジアの国々、その他、アメリカ、フランスなど 44 か国からアクセスされ、その数は徐々に増えています。

今後、このデータベースの効果的な運用に向けて、新教材の発掘や英語版の更新など教材情報の充実を図るとともに、掲載されている教材が従来の指導意図や方法の枠にとどまらず、障害種を超え、多様な指導の機会や場面で用いられるなど、新たな教材活用の可能性を探っていく予定です。

また、インクルーシブ教育が進む中、この教材・指導法データベースを活用した研修プログラムを開発、提供し、特別支援教育全体に貢献したいと考えています。

これからも、逐次、教材情報の追加を行っています。教材提供をよろしくお願いいたします。



桐が丘特別支援学校 風船ベッド

活用の
紹介

【教材名：風船ベッド】

圧縮袋に風船を入れ、空気を抜いて作ったカラフル風船ベッド。寝転がるとフワフワ、ポコポコとした感覚を楽しむことができます。桐が丘特別支援学校では、この風船の中に鈴を入れ、音楽を流しながら心地よい揺れや鈴の音色を楽しんでいます。



聴覚特別支援学校 遊び

この「風船ベッド」を聴覚特別支援学校の乳幼児教育相談（けやきルーム）で活用した例を紹介します。

けやきルームの T 君と A ちゃん（1 歳児）、初めて見る風船ベッドに興味津々。トコトコと近づいて、ついたり叩いたり品定め。「大丈夫」と思うや否や圧縮袋の端を掴み、ヒョイッと放り投げてみました。軽い力にもかかわらず風船ベッドはふんわり宙に浮き、T 君の頭上にゆっくり落ちてきました。このハプニングに T 君は、大喜び。投げては落ちる、投げては落ちる遊びを思う存分楽しみました。それから、親子で風船ベッドを押し合いへし合い、タックルバックまがいの風船バックに早変わりです。

「大きな袋につめる」という工夫で風船バック、風船トンネル、風船ハウス、風船迷路など遊びのアイデアが広がります。空気の抜き方が甘かった、風船の大きさを均一にしたら良かったと改善点がありますが、その反省こそが教材・教員の醍醐味でしょう。このように SNE-T では、創意工夫や柔軟な発想により、一つの教材が障害種や年齢を超えて幅広く活用された例を紹介していきます。

筑波大学特別支援教育 教材・指導データベース
<https://www.human.tsukuba.ac.jp>

附属特別支援学校の取組【大塚特別支援学校】

「合理的配慮」と「意思の表明」

主幹教諭 中村 晋

附属大塚では、日々の教育活動へ主体的に参加できるようにするための個別の配慮を「合理的配慮」として捉え、学習上または生活上の様々な困難を支えるツールを提供しています。また、全ての幼児児童生徒（以下、子供）にとってわかりやすい「基礎的環境整備」による支援も行っています。ここでは、本校運動会での「合理的配慮」の一部を紹介します。

①本校は様々な学習で音声ペン（Gridmark 社）を使用しています。言葉表出のないAさんは友達の声や録音した音声ペンを使って「開会の言葉」を表現しました。自慢気に操作するAさんの表情が印象的でした。



②開会式のパネルが貼付されたボードから進行に合わせて表示を剥がすBさん。式への参加が苦手のBさんに「役割」を与えたことで積極的に取り組む姿が見られ、他者から評価される機会も増えました。



③小学部ではプログラムにイラストと音声を読み込むドットコードを貼り、いつでも確認できるようにしています。ICTの活用によって活動を見通す力を養い、主体的に学習に向かう力を育てています。



④低学年ではホワイトボードにプログラムを提示していました。児童は進行に合わせて表示を外して、見通しをもたせます。一つ一つの表示にも音声ドットコードシールが貼られていました。



⑤見通しを持たせるツールは、同時に気持ちを落ち着かせる（情動調整）ツールでもあります。Cさんは運動会のプログラムが順番に印刷された手のひらサイズのカードを見ながら次の活動を確認していました。



⑥このカードは、活動が終わるたびに、担任がハサミでカットしていきます。手元のカードがなくなっていくので、残りの活動が一目でわかります。Cさんはこのツールがあることで安心して参加ができました。



⑦音が苦手なDさん。リレーではスピーカーの前で立ち止まってしまうそうです。本番ではDさんが走る時だけナレーションもBGMも消して声援を送りました。持てる力を発揮できる環境を作ることも合理的配慮の一つです。



⑧「基礎的環境整備」は、誰にとってもわかりやすく環境を整えることです。投てき板には、長さが1mほどの大きなプログラムを表示し、競技中の種目が一目でわかるように矢印で示しました。



私たちは、卒業した子供達が社会に参加する場で、「合理的配慮」の提供を個人の権利として伝えられるスキルを身につけて欲しいと願っています。そのために幼稚園、小学部段階から、より多くの生活経験を積み重ねるなかで、自ら考えて何かを選択する機会や、自らの意思で何かを決定する機会を積極的に設けています。また、自分の言葉や、補助代替手段を活用しながら表現する学習を通して「意思の表明」ができる力の獲得を目指しています。一方で、言葉を持たない子供の意思を汲み取り、尊重する努力を行っています。子供の権利を擁護する立場にある教師や保護者は、表現機会が少なくても、主体的に活動参加する子供の姿や表情から、本人の「願い」を受け止め、代弁することが大切であると考えます。本校では、全ての子供にニーズ調査アンケートを実施し、これまでに受けてきた支援やこれから必要と考える合理的配慮について話し合い、合意形成を踏まえて「個別的教育支援計画」、「個別の指導計画」に反映させています。

お知らせ

特別講演

日 時 平成30年9月29日（土） 13:30～16:30
場 所 筑波大学東京キャンパス文京校舎 134講義室
テーマ 特別支援教育の今日的課題と特別支援学校への期待

講演1 講師 青木隆一氏（文部科学省初等中等教育局視学官（併）特別支援教育課特別支援教育調査官）

講演2 講師 安藤隆男氏（筑波大学人間系教授 インクルーシブ教育システム開発リサーチユニット代表）

【主 催】 筑波大学特別支援教育連携推進グループ（附属学校社会貢献準備会）

【申込み】 メールもしくはFAXによる申込み（定員100名、先着順）

メール：snerc@human.tsukuba.ac.jp FAX：03-3942-6938

【主な年間予定】

7月23日（月）～8月3日（金） 平成30年度免許法認定公開講座
9月29日（土） 特別支援連携推進グループ主催特別講演
3月25日（月） 特別支援連携推進グループ主催研究交流会

【筑波大学附属特別支援5校の研究協議会等予定】

11月14日（水）～16日（金） 聴覚障害教育担当教員講習会〔聴覚〕
12月7日（金）～8日（土） 自閉症教育実践研究協議会〔久里浜特別支援学校〕
1月31日（木）～2月1日（金） 肢体不自由教育実践研究協議会〔桐が丘〕
2月8日（金） 知的障害児教育研究協議会〔大塚特別支援学校〕
2月16日（土） 視覚障害教育研究協議会〔視覚〕

特別支援連携推進グループ（附属学校社会貢献準備会）より

筑波大学特別支援連携推進グループ（附属学校社会貢献準備会）は、国内外の特別支援教育の推進と発展に貢献する役割を担い、2018年4月、筑波大学特別支援教育研究センターの後継組織として新たにスタートしました。

5附属が協働した専門性に基づく教員研修、インクルーシブ教育支援システムの実践的な開発研究、指導法・教材教具等に関する開発研究を中心に障害児とその家族に対する相談支援システムの開発研究等の業務に携わります。今後、より一層附属特別支援5校の専門性の相互活用や融合・協働、並びに大学との連携を進めるとともに特別支援学校、通常の学校、国内外への発信に力を入れる所存です。これまで同様、どうぞよろしくお願いいたします。

附属特別支援5校から派遣されている教師を紹介します。

附属視覚特別支援学校 氣仙有実子 附属聴覚特別支援学校 鎌田ルリ子
附属大塚特別支援学校 本間 貴子 附属桐が丘特別支援学校 田丸 秋穂
附属久里浜特別支援学校 稲本 純子

編集後記

平成18年に発行を開始し48号に至ったニュースレター（SSERC通信、SNERC通信）は、今号よりSNE-T（エスネット）としてその役割を引き継ぐことになりました。今後も、年4回の発行を目指し、情報発信に努めます。

発行：筑波大学特別支援教育連携推進グループ（社会貢献準備会）
112-0012 東京都文京区大塚3-29-1
TEL：03-3942-6923 FAX：03-3942-6938
http://www.human.tsukuba.ac.jp/snec/
mail：snerc@human.tsukuba.ac.jp